



©幸せな贈り物

利己主義の前では

理念も必要がないのですか

狂乱の9時間30分 統合進歩党の中央委員会の暴力事態についてある新聞記者が表現した見出しです。また、他の記者は、組織暴力団が顔負けするほどの暴力事態だと表現したりもしました。12日に民族解放(NL)系列の「キョンギ東部連合」主軸になった統合進歩党の党権派の後ろ姿は、それこそ乱暴でした。中央委員会が進行される間ずっと彼らは、悪口、スローガン、大声を出して、ひどい場合は代表団に暴力を使いながら議事進行を物理的に遮りました。壇上を占拠して、代表団に暴力を加えた彼らは、党権派党员と21世紀韓国大学生連合(韓大連)所属のキョンギ東部連合の学生たち、統合進歩党の学生委員会など200人余りでしたが、彼らは「不法中央委解散せよ」というスローガンを午後4時40分から6時間、ずっと休まずに叫びながら、各種集会で行われたデモの方法を政党の中央委員会そのまま使いました。真相調査委員長だったチョ・ジュンホ共同代表は、髪をつかまれたまま無差別の暴行にあって失神して、近隣の病院に入院中で、ユ・シミン共同代表は、げんこつでなぐられてメガネが飛んで行きました。あちこちから壇上に進入しようとする党権派と、これを防ごうとする非主力派の間に深刻な小競合いとあらゆる悪口が乱舞しました。

いったい、なにゆえに、このようにするのでしょうか。問題の後には、必ず隠れている背景が入っています。今、韓国は地球上で唯一深刻な理念を持って葛藤している国です。李氏朝鮮時代から、政権が変われば互いに協力して国を建てて行くよりは、無条件に反対して押し通す理念対立の政治でした。論争はあっても、代案と方向と未来を提示する討論はありません。しかし、今は「自分たちの利益の前には理念も、統合も必要ない時代で、ますます狂っていきつつあるのではないか」という疑問さえ感じます。

みなさんは、現実の左派、右派の主張と、政治家たちの姿の中にまことの愛国を感じますか。愛国というより、隠された理念の争い、自分たちの既得権のための利己主義の争いではないのでしょうか。本当に国家を愛して、国民のためならば、ことばも行動も、自分たちの立場や利益だけ主張するのではなくて、今の現実だけ話すことはできないでしょう。もし私たちがお互いを理解して受け入れて超越できないならば、私たちに残っているのは争いと苦痛だけです。私たちは、一つの船に乗っています。船が破船すれば、いっしょに死にます。その苦痛は結局、あなたのことでも、私のことでもなく、私たちすべてのことで、次世代の持たなければならないことです。

なぜこの社会の混乱はずっと繰り返すのでしょうか。まず人間がどうしようもない根本的な3つの背景があることを聖書は語っています。聖書のエペソ人への手紙2章1節から3節を見れば、人間は神様を離れた

後、暗やみと混とんとむなしさの中に生きなければならぬ、罪と罪過で死んだ状態になってしまいました。そして、この世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち悪魔の影響を受けるしかなくなりました。人間は、結局、生まれながら御怒りを受けるべき子どもになって、サタンがもたらす利己主義と貪欲の奴隷になってしまいました。これが人間を戦うようにさせるのです。

この貪欲の開始は次のとおりです。神様のみことばである聖書には、人間が創造される前からあった暗やみと空虚と混とんの実体、サタン(悪魔)という存在に対して確かに明らかにしています。このサタンは、悪賢いうそで人間をだまして、幸せの根源である神様を離れるようにさせました。そして、人間の頭と心の中に、肉の欲と目の欲と暮らし向きの自慢でぎっしり埋まるようにさせました(ヨハネの手紙第一 2:16)。それ以後、人間は自分の欲を満たすために絶え間ない闘争の生活の中で、結局、不幸が繰り返すしかない運命に陥るようになりました。弱肉強食の世界の中に捨てられた人間は、生存の問題を解決するために欲がもたらす力の原理に支配される生活を生きていくようになりました。それゆえ、争いと葛藤によるのろいと災いの悪循環は繰り返すしかありません。これがまさに人間に向かったサタンの願いです。それでは、いったいどのようにしなければならぬのでしょうか。

人間を変える奇跡の時刻表 人間の根本を変えれば良いのです。最初の人間がサタンの誘惑に負けて神様を離れた以後、すべての人間は3つの運命から抜け出すことができなくなりました。サタンの奴隷、罪がもたらすのろいの運命、そして永遠な地獄の刑罰と死の権威から抜け出すことができなくなりました。その結果、人間は自分も知らない間にサタンに捕われて絶え間ない争いと葛藤の中でずっと繰り返す不幸な生活を生きていくようになりました。私自身も理解できないで繰り返すおかしな問題(霊的問題)と、生活を送っていくほど訪ねてくる不安と恐れ、それで偶像崇拜の中で起きる個人と家庭と家系の相続の苦痛。心のむなしさの中で増えていくうつ病と精神問題、結局、日常生活まで正しくする

ことができなくて自殺する人々の数は韓国が世界1位になっています。自然に、肉体の健康も、人間関係も崩れるようになって、あらゆる病気に苦しめられるようになりました。結局、人間は死ぬようになって、地獄という永遠な苦しみと刑罰の中に陥るしかなくなりました。私が持っていた良い点と悪い点など、霊的な問題と偶像崇拜ののろいが、驚くことに子どもにすべて伝えられて、不幸の相続が続くようになります。

人間に何の希望もないとき、神様は人間の問題を解決して下さるために、人間を救う計画を立ててくださいました。その方法は、神様が人間のからだとなって、この地に来られることでした。その方が「イエス・キリスト」です。イエス・キリストは、神様を離れたすべての人間が神様に会うようにする唯一の道となるまことの預言者です。イエス・キリストは十字架で私たちの罪の代わりをして死なれることによって、私たちのすべての罪を解決して、のろいと災いから解放して下さったまことの祭司です。イエス・キリストは聖書の預言のとおり十字架で死んで、3日後に復活され、今でも人間を困らせて地獄に引っ張っていくサタン(悪魔)のすべての権威を完全に打ちこわされたまことの王です。聖書は、このキリストの働きを果たされた方がイエス様であると明らかにしています。人間が絶対に解決できない根本問題を完全に解決された方がイエス・キリストであるということです。それなら、どのように私のすべての問題から解放されて救われることができるのでしょうか。

イエス様をキリストと信じて、私の心に受け入れれば良いのです。このとき、神様が永遠にともおられる神様の子ども身分を得ようになり、本来の人間が味わった祝福と権威を回復するようになります。

今、この時間にあなたはイエス・キリストを受け入れることによって、神様の子どもになって、すべての運命から、争いとのろいの災いから解放されることができます。真実な心でイエス・キリストを私の人生の主人として受け入れる祈りをすれば良いのです。人間の根本を変えなくては、どんなことも変わりません。あなたは本当に大切な人です。

神は、実に、そのひとり子(イエス・キリスト)をお与えになったほどに、世を愛された。
それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、
永遠のいのちを持つためである。(ヨハネの福音書 3:16)

「聖なる民」のまことの意味

イエス・キリストを信じて教会に通う人々を聖徒と言います。このことばは「聖なる民」という意味です。それなら「聖なる」ということばは、どんなことばなのでしょう。ローマ人への手紙6章4節には「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」とされています。すなわち、イエス・キリストが十字架で死なれたことによって、人間の不幸の根源である滅亡、のろい、原罪は葬られて、イエス・キリストが復活されたことによって、人間の本来の身分と権威を回復してくださったというみことばです。

ローマ人への手紙6章6節を見れば「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています」イエス・キリストを信じる前にはサタンの奴隷、罪の奴隷であったのですが、信じた後にはサタンの奴隷、地獄の奴隷ではないというみことばです。

どのように、神様が私たちにこの祝福を与えてくださったのでしょうか。聖書は「神様の値ない働き、はかりしれない恵み」と言われています。この祝福は努力でなされたことではありません。功勞で得ることもありません。私を空けて、解脱して受けるということでもありません。私たちは自分からは絶対に地獄からは抜け出せません。それで、神様が恵みでくださったと言われました。神様が私たちにこの祝福をくださったのは、全人格(知情意)に祝福をくださるためです。そして、私たちの原罪と自分が犯す罪をなくしてくださいました。永遠な死と地獄の原理の法的権威をなくしてくださいました。それで、私たちが義と認めて生きるようにしてくださいました。一言で話せば、神様が私たちを完全に区別されたのです。全く希望がない私たちに神様は恵みをくださったのです。

まだ理解できないならば、一人で質問をしてみるように願います。「私は本当に罪がないのか」少しだけ真実になったら、私たちの人間は罪ののろい中で希望がないということを知るようになります。罪の中で許されることもできず、抜け出すこともできない、それこそ悲惨そのものです。それで、神様はイエス・キリストを送ってください、十字架に死なれることによって、すべての罪を殺してしまわれたのです。この祝福を値なしにくださったのです。それも、最高の祝福である神様のかたちとして生きるようにされたのです。人が悪くても、そうでなくても、お祓いをするのではなく、全人格的に私たちを新しく呼ばれました。それで「死」ということばは「終わり」のことですが、「罪を死亡させられた」と言われました。ただキリストだけ救いを受けることができます。それで「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」(エペソ人への手紙2:8)と言われたのです。人間はサタンがもたらす靈的問題に勝つことはできません。それで、私たちにいつもキリストが必要なのです。

神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様。私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してくださったキリストであると信じます。いま、私の中に入って来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子どもの 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン



まことの師匠を探して

師匠は自分を教えて導いてくれる人だ言われている。この意味は、占い師のことばということなので、教えには必ず神的な要素があるということだろう。それで、以前には師匠の影も踏まないといっていたが、この頃は教権が地に落ちて、教師の位置が危険な危機の時代を迎えている。教師が尊敬の位置を失えば、教えは方向を失うようになるから、その結果は共同体の未来を失うようになるのだ。教えを受ける人は、教える人の言動から心の思いなど一挙手一投足をそのまま習うようになっているのに、この頃は教えと生活が分離していて、教えの限界がきたのではないかと思わされる。

初代教会の伝道者パウロを教えたガマリエル (Gamaliel) 師匠は、彼の教えでヘブル学派を成し遂げて、彼の死後に後継の師匠を選ぶようになった。彼の師匠の代わりをする弟子の中から、彼の生き方を継続する知恵と知識をそろえた者を選ぶのが大きい宿題であった。彼の代わりをする師匠の座にたてる人のための試験をするようになったが、その問題はとてもやさしかったのだが、簡単にできることではなかった。それはガマリエルが生前に毎朝犬をつれて散歩をしたが、その犬をつないだひもの長さを正確に合わせることであった。師匠の後に従うのが知識はもちろんではあるが、このように単純な生活の一部分までも完全に従わなければならないという重要な悟りであった。それだけ師匠の座は重要で、その教えは完べきであるべきで、世界の歴史の中に現れたソクラテス、孔子、釈迦、イエスなど4大聖人はみな偉大な師匠であった。

ソクラテスは、神的な知恵を持って青年たちを指導したが、死ぬときに、弟子たちに後ろの家のおばあさんに雄鳥一匹借りたこと返せと言ったので、借金もみな返せないで死んだ先生であった。孔子は、自分のさとりを開くために、3千人の弟子とともに全

国を巡回したが、王たちが自分の話を聞いてくれないので、十分に悟りを開くことができなかった。

釈迦は、王の座を拒んで自ら苦行の道に入って、人間が何かを苦悩した良心的な修行者であった。結局、彼が発見したことは道があることはあるが、分からないから、そのまま行ってみるしかないという人間的な教えを与えるしかなかった。このようにすべての師匠は、道を先に行きながら、それが道だと道を教える者であった。その教えに多くの人が反応して、少しの間、心に安らぎを得たが、それが人生に永遠な教えにはなることはできなかった。なぜなら、人々は道がどこにあるかを尋ねるのであって、道に関して尋ねるのではないためだ。事實は、師匠イエスは、この地に人として来たが、事實は神の位置にあった。教えを開きながら多くの弟子が従ったが、彼は道を先に行っただけでなく彼自身が道であった。有史以来「わたしが道である(ヨハネ14:6)」と話した人は地球上の、どんな偉大な師匠であっても存在しない。それでは、どんな師匠も自分を道だと話さないのに、どうしてイエスは、自分が道だと話せたのであろうか。それは、彼が事実を語る者が、そうでなければ精神病患者であろう。結果を調べてみるのは単純だ。人間が持っている問題があるとき、それをどんな師匠でもその教えに数学公式のように対応させてみれば答えが確実になる。

自らを知るのが答えなのか、礼を尽くすのが答えなのか、知らないというのが答えなのか、わたしが道という方に従うのかということだ。私が持っている解決するのがむずかしいその問題を、本当にさわやかに解決するところを知らせるその方が、私の本場で永遠な師匠になるのだ。

チョン・ヒョングク(福音コラムニスト)

* 相談したい方はこちらまでどうぞ